椿說弓張月

三 巻

へ13
2945
21

門へ13
2945
巻21
昭和九年七月九日 購求
二十九ノ四

鎮西八郎為朝外傳 椿説弓張月 拾遺 巻之三

東都 曲亭主人編次

第五十一回

南風原城に入て妖婦利勇を惑ス
佳奇呂麻に赴て漁師主女を迎ふ

鎮西八郎為朝ハ辨嶽の麓なる山神廟にて散錢擅を打用ることなれども。ひとりの美女。擅の中より出たり。その形勢いと怪しかりければ。走り避んとすれ共。縁由ありて同じく入べ。女子ハいとく怕しとてこれ迷ひ入るも回答ぞ。たゞ〳〵問れて申さく。ふしぎ〳〵。此山の北邊なる。保似村の村正某甲が女兒にして。名を海棠とぞ。いはる。秋。采女司ふえふみとられて。首里の王城へ。ぞ。もとゝ。ぞ。これ都城の騒動。浪風。たゞ〳〵世となりて。その

らをのりし幸のさ。只いさづくに蟄る折ふしこの曉方ゐ曙雲國師の大わゐ全廣といふ猛者ゐ。夥の軍兵を領ゐ。つゞ村よ乱入り。老ゝる弱き差別ゐ。蠶は仕る行ゐ。つゝいゐ親同胞も。ゆく〳〵命を隕せゞ。つゞ身を双の下に潜りて不思議ゐ脱れ去ゐれど。ゐ不追撃ることりや。とゝへば悲〳〵おそゝしく。ゐの古廣ゐ走り入り。好くかくろひ住り」なり。ゐん身も又曙雲法王の伝登之ゐて羅ゐれりの代砂殺〳〵快」と云まゐ。今へ命代惜むゐひは。勅ゐ顯身の世ゐ存命ていくぢゐ。憂をゐるめの涙の磯ゐ。あまとゐれども乾うは袖ハ浮む瀬もゐれ歎なり。ゐ又首里の兵士ゐて。南風原の親方の恩顧の人ゐとゐふゐ。ゐろゝもゐとのは代。訴まうして國の為。つゞ身の為ゐ親同胞の寛を願ひ。とゝひうけてゝ法声ハ友ゐ離れ浦ゐ鳥。さてゝ赤

餘吾の松ゐ。羽衣を掛失ゐ。天津少女ゐ彷彿ゝり為朝をたゝくと。緯の来歴を笑て眉うち顰。早不ゐれハ曙雲ゐ兵士ゐ。日本國より漂着せし為朝と呼ゝりの。近曾南風原ゐ身を倚れど汝ゐ寃苦を訴ゐ。ゐれ力及ぶとも親同胞の枉死を見捨てゐ。かひゐも脱ゐ去りい孝節両ゐ。ゐれと教ゐ女流のうゝゐ。ふゝ〳〵答ひ。ゐれ〳〵ゐふゐ。そふゐ。ゐれが。南風原くゐてゆくぢ。とゝこの櫃ゐ入れし。と宜へば。海棠を世ゐ憑ゐ。ゐりもちして落る涙ゐ。拭ひ。数回ふゝ拜ゐ。ゐゝて為朝ハ海棠を舊のゐとく。散銭櫃ゐ潜ゐて就ゐ。と怨の涙をも。その中へ投入れ。楚と蓋ゐてこれを背負ひ南風原を投ゐゝゐりゐへ。その日もゐ〳〵傾きぬ。この朝大臣利勇ハ四門を戍る筑登之ホ下知ゐ。為朝既ゐ。三日の約ゐ乖ゐてかくり来ゐ。ゐ今日ゐ

及びて立つ人なしも決して城中へ入れそ汝ホリ由断して門内へ入ること
あらば軍法をもつて罪さだしといと厳重の命ぜらるる衆皆うけたまわる
正門後門の番卒を増加えこれを守ること寇を禦ぐに異ならざるかくこそ
ちくぶ為朝は散銭櫃を背負ひつつ城内へ入らんとしたまふ番卒ホ遽しく
手ゆく捍棒を打ちあいして遮さえぎめ申されは為朝汝既ホ三日の約ホ乖き
ながら阿容々々と入りまるる面の皮こそいと厚けれ吾們親方の仰を禀
たり今は一足も入ること叶はじ命をしらば銷ても失よ幸ホその首を全
さべれと罵れば為朝は大なホ怒り小ざるしき燕雀の共
嘲り汝ホが為る所ホあらじ汝ホ処分あり妨さるといふすき
て逆茂木のごく左右より打合しき捍棒を足りて丁と拂ひ退け
進み入らんとしたまへば諸ハ狼藉なりこのくめれて金棒を閃し群衆

て打ちく蒐る所為朝は夏の雨よりも繁く頭の上へ
打かくれ捍棒長鎌鎗尾の槍所撫でやくりは。あらしは踏折り撥生
捨へるき郷をゆくごとく百歩あまりぞ入りまふ二の城戸をちる気登之
ホこの形勢所ハて手を巻て入れ立てかるはとて門扉を礙と潰したり
當下為朝はさるくと歩こよりて散渋櫃を負ひくるまく二の城戸ホ
手をかけて一声高く推しあけ関木やりくと中より折れて城戸ハ左
右へ開くその賛力鴻門ホ沛公を救ひしる樊噲ホいやましられで
ほとり近き兵士ホこひくく靡ホあり立られ或ハ跡をうち砕れ或ハ
手を負ひ腰を折られ半死半生なるりの数十人辛じて逃ものも群
がれ羊の頭所低く猛虎ホ向ふホ異なふ舌を吐まとはりて
阿容々と通しぬ。さる程ホ大臣利勇ハ事の趣を聞て大きホおどろき

如く松壽を恨みて噛くと呟いつ。按司親雲上ハ氏子集合ふ器械をとりて正殿ハ立出武藝ある里之子二十人ハ弓矢を取りて左右ハ侍ひ。為朝奥ふく進み入れば。乱箭ハ射てこれとく。その准侯大うとるふ。松寿ハひとり若くもひしかど正殿ハ走り入て。利勇を練ていりたれ。為朝ハ蓋世の勇士なり。威をりてこれを制しかど。國の大幸ハ人を殺ふ事ふまとことを。ひしかくハ親方。安谷屋ハ剣を解。弓箭を去ひし辞を安寧ハ礼儀をりて彼人を数行しまへ。ひしかふ。福却禍の端となふん。といふせもなく。利勇忽地眼を睜を。汝いまぐ醒ぞや。かくれ癖者ハ吹挙して再び禍を惹出ふ。者奴を搦捕んとふせど。為朝ハ吻ハ動こそ奇怪なれ。露だりもその非を去ふば。為朝が首級をとりて。これハこれ縁。といてまき高く心づくハ責れども。いまぐ戦栗ハ止ざりたれかひし行ハ為朝ハ前後左右ハ。槍穎をはたりかける。紅登之二三十人ハ送ふれるぐふ。悠くとして。まるくハあれよ。ぞうハ今まぐ勇ハ按司親雲上。里之子ハ至るまで互ふ面をあひして。惶怪として。そる所を去ふ。利勇ハ乱ることせず。豚ハ似ふれ声をふり立。東方の浮浪人既ハ紅ハ弟きなかふ。なれ恥を去ふど。刃のおれ所なれまふに。物ハ行ふハいふハそや。汝樊噲ぐ勇ありとも。これ又項王の威をるふんや。縦鐵壁城ハ破るとも。一言の約を破りかさん。推ふなり。と罵れば。為朝呵ふと冷笑ひ。怪有るこをを生くりのふ。大臣今幼主を補佐。信義をりて擾乱を鎮へと。そぐれりのふ。言を去端ハよりて。義士を容れぞ。これ民ハ説り教ふハあふぞや。夫辨嶽ハその行程近きまあふ。加以山川の険阻あり。翅ハ去

美女ニ惑ひて
利勇
為朝を
勸賞ス

翔も陽りがたし。為朝昨夜件の山を出れといへども路遠なれば今ハ及べ
文ハ三日の約を違るにあらば且うけ取る三箇條を悉く果さ
いとぜ〻ハ日を数へく賞なれハ人の切と棄ふ。これ人ならへといひけ
て負る櫃をあらーあくで。利勇ハいまゞ實るみとせと頭を左右へ打掉て
いへどもいろ〻りのうゐ。そふ為ハ汝曙雲ハ幻を以て怪〻れ櫃を負ふ集
まるふ疑ひ。そのゞもその櫃をうち壊て換こんよと下知されハ紙袋之
ホ阿と回答て。拿る槍を突揺へ一度ふ刺んと競ひ〻をりのくゝや。
と為朝ハ眼を瞪じこえうりまふ。その勢ひハ碎易し衆皆尻居ハ撲地
とゆゝと。利勇が左右ハ立〻りされ。按司應窪親雲上呂緑らく。武藝力
量のゆゝえゐる上官二人袖うちめげて走りかゝり。蓋を開んと走りしが為地
ハ眼瞑こて。りうさもに倒れゝり。里之子ホいこれをうけて二人の上官為朝

ハ投伏られゝりとやいひひん。利勇にあやまちのゝせとて。拿るこ
弯ゆゝる。蠱の和ごとく射かれども。為朝の身ハふゝぐ。散錢櫃ハ
斜ゝ。たゝ翁前ハ櫃を射ゝふせ。内ハ一声叫若と叫び。ひとりの美人
輾ひ出ゝり只これ雲を出れ春の月れ。梢の紙ハかゝほがごとく。まゝと彼
宮城野の櫃の芳宜更ハ都ハ旬のふハ似ゝり。利勇ハ呆ひかけざ〻て。
あれそいゝふとゞめりふ。直と呆れゝ目紙細くし。とえかうえれハ按司
親雲上。筑登之里之子ホハらゞも。器械を裏離と捨猛ハ髪と種
拂て。ゆゝめれ官帽紙押正。膝を立顯を反ゞ縦ハえ横ハ打みゞめ
て。意彼首にあゝざはりのゐし。此とれすでも陶松壽ハ默然として
居ゝりれゝ。忽地席を拍て為朝ハ。ことこ向ひ喃ハ曹司時今播乱
の際ハ逼て士民ちの〻融預孤疑を。この故ハ大臣かゝ〻しく人を

容ろづ。かるべ怪しみるべうべ。さても何の故ありて。この女子を使ひ給ひ。縁故ゆゑまま〳〵と詰問ば。為朝莞爾とうち咲て。この件のゆゑ聞きて。種〳〵の来歴あり。某きの山辨嶽ゆ大鳥代射て。鷲巣山の麓ゆ追ひ。ゆゑ絶ゆ。これを刺留て折ら。兄弟と共に〳〵て。二人の少年。如此〳〵の衣を与へる。敵ゆ追れて走り来つ。此ども脱ぐ。しとやゆ。ひゑん。彼ゆ遂ゆ〳〵追ひ〳〵へ。追敵の兵士と血戰して。矢庭ゆこれを射ま。ろ〳〵。某樹蔭より。その為体を見て。彼少年を相織して。速ゆ首里へ赴て。絆のよしを曙雲に報知んといふ。こゝ同じ。ども少年ゆ。国賊曙雲が手より。と猜〳〵たまへば。某一唱して。樹間より走り出。忽地件の少年ゆを射まとりて。その首をうちもとに。軀ゆ立地ま消滅て。二ッの首級ゆ目前。熊の頭と変じ。怪して。限りなけ。

驚く。驚の頭を掻切ゆして。是彼ひとゆ右手に引提辨嶽のうこへ。とて立ゆ。保似村と。〳〵の樵夫山児ゆ曙雲が賊兵ゆ乱妨せ。おの〳〵痛痍負。ゆ。路傍ゆ仆ま。為朝こゆ。その消息を為とい。ども。ゆ時後れ。れば賊兵を射ま。ゆ。よ。ゆ。只懐中なる茶を与へて。ちど手負と勦ゆき行く林原。なゆ。山神廟の。ほとりゆ。して。さの女子に遭ね。よりて。その故を問ば彼。も海棠と呼れて。保似村ゆ。村正の女児なり。嚮ゆ親同胞と賊兵。ゆ射れ。いひ。ひゆ。も只ひとり。辛じて脱ま去り。この廟内ゆ躲。たりとい。且この海棠ゆ。王宮へ。るべ。し。采女ゆ。れども曙雲が戒逆の騒擾ゆ。て。この頃衣袴なんどゆ賜り。ゆ。ゆ。南風ゆ。へ。る人ゆ。ゆ。扶引て。ゆ。為ま。寃苦を訴ま。ひ。ゆ。と。為朝木石ゆ

あらざれバ。その哀傷を見捨がたくて。これさへにおそく擁りしを頻りに日を数へて。城中へ入られバ。これを欲する所今一トたび。大臣に見参して俤の為体を告まうさんと思ふのミ。絶て野心あるにあらず。されバ許しあへりしと實事虚言うちまぜて審に述說て濺びし櫃を引よして三の頭をとり出し。松寿がさゝへ指向るへバ。利勇ハ松寿が同報と待遽く倚子を離れて為朝に對ひつゝ。眼ハ人なきに勝れて大きからねど。才浅く智足らざれバ。真の豪傑を認らず。幸に外なる辺が撃うたれ少年ハ毛国挙が子どもに誘亀と喚れてこれが仇とし寵らりの既に前夜箇様ゝゝのことありしなれども。なほ精忠と君真物の憐こあひて。それにもその教さり彼誘を生拘り松寿がすゝめによりて如此ゝゝにそうふハせしにその計策合期せざ。曚雲が伏兵

全廣ニハ刼されて。かゞ腹心の兵士趙豹李虎を失ひしが。今又名人ぞ彼誘亀を。赤曚雲が幻術にて。假にそのものと見せられしのミ。實を彼ニ赤瀬の碑のほとりなく生拘られしミ首を刎られるに疑ひなし。こゝにはじめて邊の武勇によりて曚雲が詭計を志りつ。かゞ欲びこれ一ッ加旃美女海棠を倦ひ。その寃苦を告まうりしハ義あり信ありその功賞せずハあるべからず。抑かゝる名家として。世々高官を辱し衣食満足りて乏しとも思ざりしが。いかなれバ笑人を見る虞舜を娥皇女英を辞せず曹孟徳の英雄なれも二嬌を銅雀に携ざる恨とせりつれ今この美女姿容ありとも勇士為朝あり智に松壽あれバ曚雲が幻術も怕るゝに足らねバ。寔に曹司ハ人中の龍海棠ハ亦女中の花なり。その龍も用ひるべし。その花も愛すべし。倩惟るに山南

者なれ大里ハ南智念玉城ハ隣北ハ首里に至りて防禦等一乃間切なり。今これ設ひのまつりに曹司を大里の按司とすべし。与那原与古田湧稲嶋より島袋高宮城ハ至れまで十八ヶ処の属村城宮領し。二百騎ハ将として大里の城を立ること大功を立ること満悦面ハあらられて。その裏反を勧賞ハ為朝ハをうち猟て。某させる績なし。今その女子ハ故をりて按司となるんハ本来の情愚ハあらず。と推辞なべば。松寿遽しく小勝をとめに曹司。ゆるしてかくハ謙退ものハ賢者ハ民を利して。国おのづから富といへり。大臣者その人ハ好く重く用ひるるハ抑国の福なり。推辞ものふことうハと況諭せば。為朝亦宜ふ中。ものらばこれ所望あり。大臣りかうえ好さしあるべ。大里とものるぞ。ものれども輒くハ聴ものじと宜ふを利勇ハ聴ものじ。聴ものじ。と回答ハかはるものの朝

ものうち臣ハ臣。何ハまれいひのく聴ものじ。聴ものじ。と回答ハかはるものの朝ものて領諾して按司の班ハ入る席を正くし。某ハ祝ものし。ハ寧王女ものの為なり。大臣国の為ハ忠義を盡さんとものふハ。寧王女を迎る。大里の城ハ冊き入れるべ。さらば為朝副ものる軍となりて軍配せん。ものるとものん国民こそ。大臣の誠忠を稱賛して。曙雪翼を失ふべ。と他ものるも宜べハ利勇且く沈吟していろ〳〵正理あれども。王女ハ曩ハ王命ものろく。陶松寿ハ勝れるひねるハ。ものの存命ものんや。ものハ全く賤物ものん。今ものの往方を素ものるものるべ力及ものと。諾ものらば為朝ものて。いみそのものハ公易ものれ某いものるものるべも小琉球の嶋北ものて。寧王女の心死を救ひ。ものて佳奇呂麻ハものて。ものく潜し進ものしものり。大臣これを迎ものんと。ものべ。智勇のものえものる大ものる。二百騎の進兵を授て彼島へ赴ものく。

某亦伏兵となりて曙雲が賊兵を遮り留むべし。水陸既に計畧を合せて
とれば曙雲千里眼をりて。あまくこのうれを志れといふとも。術あるべしかく
のごとくなるは疑ふらくは。白縫は志氣あるものにて。そも智
勇ともに丈夫に劣らざる。惜うるいねる八月風濤の難に係り。潮を披いて
水屑となりぬ。さうれるよりは怪しきは。白縫が魂いつの紅ゑ寧王女に
憑りて。その心操を果さんとすれば。あや。動靜云為彷彿として。妻
に異ならぬ。こゝに一世の因縁を尋れば。為朝少うりし時故あつて放せし
蛇をこの國に索ふ。舊虬山の麓に。王女廉夫人に名告あり。互に語
とを交易されるゆゑ。さればそのとき蛇つゞ多し蛇の珠に仇とおりく。
王女にふたゝび流離の身となりうるとて。ゆゑ。憂ひこゝに身の
に比べて。昔を忍ぶ。ありひありいとも怪しき亡妻の恩愛に。此

いふにいふこと首尾を箇様〳〵と。もちもなく說きたりしかば言葉
用ひまうで。公私の幸これにまさるべき。宜へば松葉が小膝と磯
と拍。大里按司為朝をの宣ふ忠信恩義を失はで王女と毛國丹が傅子く。
といふ世に曙雲が而為ふ人。王女存命のゆゑ。怪むは堪へれども為朝
の亡妻。その魂を憑れとしく。王女にして王女にあらぬ。かゝれ烈女の志
を奪ふとれば。後日の殃脫れがたく。なほ疑を決して使を遣し烈女
の魂を迎ふ。さうらふ夫婦恩義を感じて國の為大事の為。
ふもぐらもあらぬ躊躇ふことなく。とゝ說くも利勇ハ左ハ右
回答ハせず。先肚の裏ふく尋思しつゝ。これ今この海棠を容れて寵愛
せば。衆人必ずこれを好むといふん。幾の門を塞んあり。この便宜ハ王女と名
告る女子代りて為朝ふ妻に。彼ハも美女を抱きるにまうぶよしや王女世

兵を伏せん
為朝
寧王丸

在りても。按司の妻ら。曚雲滅び。王子早世ととつふも。王女い王位ゐ
即ぐし。そのとれこれ。三首諸色を嘗猛して。中山王と夫婦ゐ。進ゐ
これを奪ひとりといふべた。もろもろ。と計校既ゐ定りて。茫然と咲げる
物の情ハ奪ひ。ぐし。大里按司の亡妻白縫と夫婦ん。王女よ能着され
とれハ王女い即その人の妻ゐ。速ゐこれを迎ゐて。二世の心操をこそ
ぐそれハ松壽い二百餘騎を率く。五艘の軍船を浮べ為朝ゐ先ぐらて。
佳奇呂麻ゐ赴くべし。といそぐせば。為朝いおりひの外ゐ喜ぶく。
利勇ゐ對ひ。白縫ぐ魂。もぐし王女ゐ憑ふことのりも。某婚ぐび娶る
の意ゐし。東方一家ふの浮浪人として。ゆゑり好く國王の壻と夫ぐ王女
を辱ぬのこゐ。群小ゐ好ぐ。このゆのこゐ兼ぐし。と宜ふ。
利勇ハ絶く耳ゐもりけど。事既ゐ定りね。松壽い夜の中ゐ進發せよ。

これい阿公をりて。縁由を王子ゐ伝へえのぐべれば。為朝い衣冠を整へ拝
賀ゐぐべ。と信ぐらて。女をら海棠がゆを把て。應崔呂緑里之子等ゐ
隨ー。青宮へとて入りゐるれば燭炬ところゐなりね。

第五十二回

高樓ゐ曚雲海氣を認ぬ
大里ゐ為朝王女を娶ぬ

東風平の按司陶松壽ハ。その夜俄頃ゐ軍兵の部ー。て。小禄の港ゐ
艤ー。次の日の順風ゐ。佳奇呂麻を投て漕ー。と。松壽ハ原来才智
凡ゐふざ。ぬりのなれば。この時ぐ。と呂ふ。利勇ハ錦の裃ゐ。ゐと拘
のごく。能もなくて魚肉ゐ飽き。人を志ふざれば。聖賢をこんでも。これを
吹るの類ー。されば為朝を。日本國の英雄なりと志ふ。て。しめ呂紙
用ひど。今又僅ゐ。宍人を携ゐ。ゐを貴美ー。て。忽地ゐ按司と。ぐ。て

賢を招き士を用ゐるといふべきや。遽莫。為朝大里の按司となりたまふ
るゆへ宮ゐ國の妻みて。王女の姫くゝび世ゐ生まるゐ天孫子の餘德なり。
賀をゝべゝくゝとひとりごち。おゝゐふくゝ歓びゐり。あれより先為朝ハ直
ゐ衣冠を整ゝく。正殿の階下に跪躍ゝ。王子を拜ゝなるゐ。王子ハ誕生
のめちゝいまゞ暮月みゞもるゞざれば。さるゞら木偶人ゐ異るゝゝ阿公見
を抱きて。高座ゐあり。即為朝を殿上ゐ召昇ゝ。大里の按司ゐるべゝ
よし。亦王女を妻ゝまゐ吉を伝へえ。ゐゝし。偏ゐ忠勤を抽て曚雲弧うち
滅ゝとゝゞ。と仰下されゝかゞ。為朝ハ因恩を謝ゝて退出まゐゐ。諸按司親雲上
ゐ駭然としてこれを目送ゝ。さても怪有るゝ。僥倖ゐるゝと呟ゝてこれ
を羨ゝこれを妬むも又多ゝり。かゝるゝし行ゐ為朝ハ。詰朝筑登之佑二人
を御導とし。雑兵九人をまゐりて。大里の城ゐ赴ゝ。城中の士卒ゐ對面

しゝ。ゆゞて十八ヶ村の村正ゐを呼集合。税歛を薄くし。法令弧正ゝくし。
まれるゝと賞し。叛ゝを罰ゝまゐ。上ゐ枉れる俗吏ゐ。下ゐ僻ゐ頑民
なゝ。衆皆赤子の母を仰ゝるゐちゝ。かゝれ良ゐの下風ゐ立んゐ。
世ゐ有がゝゝ洪福なりとて。いと憑ゝゝ思ゝをゐ。かゝて賞三日
ゐ及びて為朝ハ城中の軍兵を集合。鄉ゐ陶松義ゐ佳奇呂麻へ赴き
より。倭れゞゝや。ゆりまん日も生をゐ。これ今夜子の刻ゐ百五十騎を
招て城を出。真和志の山蔭ゐ屯して。松壽ゐ俘るゝをまゐべきゝ。さゝとて
昨夜間者を遣ゝて。彼処の地利を探間ゐ。真和志。字平の間ゐ大河
あれゞも。上ハ二股ゐゝうれて陸ゐ続ゝ。その流れ海ゐ入り東のゝゝ長川
のほゝりに高峯ゐり。これ兵を伏ゝるゐ究竟の要害ゐり。功ハ義を
ゝるゐあり。り膽ゝて敵をゝて退くゝりのハ罪決ゝて免ゞし。此旨

よく〳〵こゝろゑへと説示して。手部速に定りしかバ。その夜子の比及に。
主従百五十騎密々に城を出て。高和志の東北なる饒波長川の間樹
がちぬかれ山蔭に屯して。松寿が王妃に倡して帰り来るを待ほどに。為朝
忽地おしはかりて鶴亀ハ佳奇呂麻に赴きて。今ハ彼処にあらんずらん。
り松寿にあふれて利勇に告られしとあらバ。そのしバ敵ひがし。
とせんかくせんとおもひさだめかねしが。又はしぐと思ひかへせバ。松寿
ぞ実に利勇が輔佐の任にあらバ。彼が信ありにしてあれそれ王子
に忠義を竭さんとするハ。別に故あるべし。前の夜鶴が井に落
て。忽地擒となりしを。紀松寿ひとり利害を説てこれを助しと聞ぞ。
彼にあらずバ。防ぐに足らず。人の子をおもふにもあらず。子舜天丸ハ
いかになりけん。紀平治高間夫婦のなりゆきも。世になき人の数にや入けん。

妻子郎党離散して。それのことくに漂泊し。今一城の主となれども。
はしや功成名ハ遂れども。富貴を誰とともにか受べき。弓箭とる身を
弓箭の為に。生涯を役せられ。小人利勇が麾下に属して。かくれ
よせんと務る愚さよと。過来しかたをおもひいだせバ猛きこゝろもしほ〳〵と
れ。薄命を歎れまふなれバし。案下某生再説。陶松寿ハ順風
にまかせ帆掛て。大洋数十里を走らし。次の日佳奇呂麻に着船して張
方にまかりて人をりに隠るゝに人影もあらざりけるをあやしく
巨木の虚に老たる男女蹲れ居るを見出して。その故を問に件
の老夫婦。おそるおそる這出て今朝しも大将の軍船この嶋に投て漕
よしまゝ島人みな〳〵ものとて。ふかく怪しみ疑ひへらもあらぬ曚雲
法王の軍兵なるべしとて。衆皆慌忙て山ふかく逃入てかくれしぶ。

吾倚いまだ老られば。おのれ山に登ることもえせざりければ。こ
かくひとりつ。松壽ハこれを笑てうち笑ひ。汝ホさん怕れなせそ
これハ為朝の所為なりて。王子の仰をうけまつり。寧王女を南風丞
かくしいれまゐらんとなるなり。按司陶松壽なり。汝ホ早く為長よ
このよし告よとて。いと叮嚀ふ説諭せば。老夫婦ふたり歎びて。
おのく杖を携りつ。山路を投て走り去。一响のまり程へて。為長
林を出て。ゆくて生下毛岳ホ。沙ふ沈て穴埋めて。数回松壽ハ
拜されば。松壽ハ長をちうく招きて為朝を大里の按司ふ任ぜられ
ぬるなり。且彼人のまうけよりて。王女ハこの浦ふ在ることを知
ぬ。をみつち松壽とのて迎とぶしまつふ。王子の仰を述て大臣利勇の
処分ふよりてまれりと説ぶされば。林をまゐふ〜歎ひかゝれど

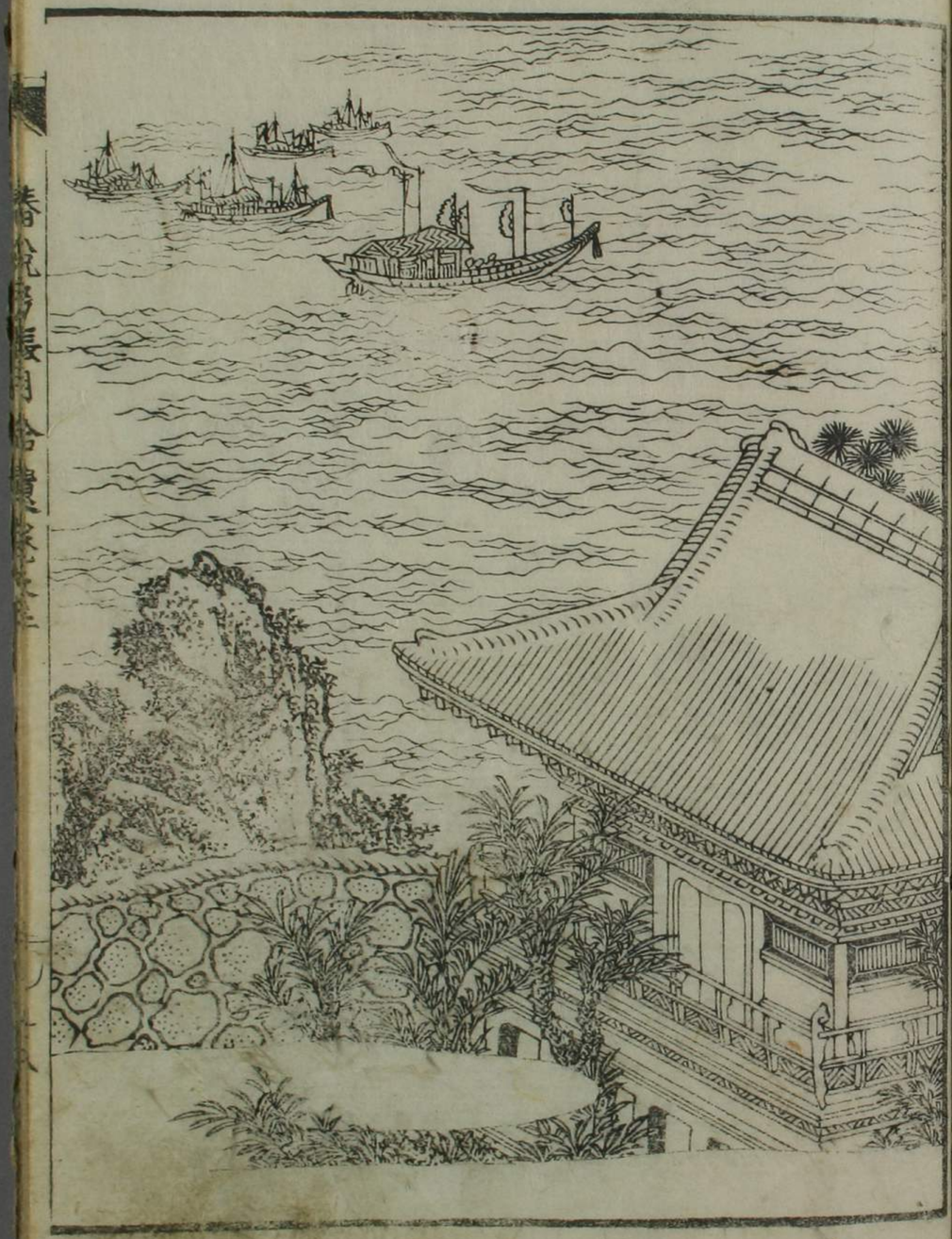
とハいひひとりなど。遥ふその弘をえて浦の老弱驚れて騒ぐ。こハ喋雲が
討まの兵ども出まふれ。り脱れるまりやとて。衆皆山路く躍く
ふ。王女ひとり騒ぎまうどなくふさることやハある。そうふ彼軍船ハ
南風丞より。これを迎の使ふ行べしと宣ひ。るほ仏ひとるくれば。
つりみく王女を斧負ひ進ふせて岩崖の中へ潜りまりしふ。この孝
夫婦が此〜くのよしと告ふ。清〜れこちして。じめて王女の睿智
を感じ。まつ王女をび長が家へ伴ふ入れまつりね。えくふあるべ。いひ
果て。こゝ先ホ〜ちて誘ふ〜まで。松壽ハ軍兵城方ふ残とぶ。
僅ホ十人の紀登之とのて。嶋長が彩ふ赴れ。王女ふ拜謁して為朝の
るを告。王子の仰を述ふれば。王女ハ松壽と労ひて或ハ歎び。或ハうち
泣て。形かゝた世のうぐさるひを憤り。崩御ふ尚寧王廉夫人のる。

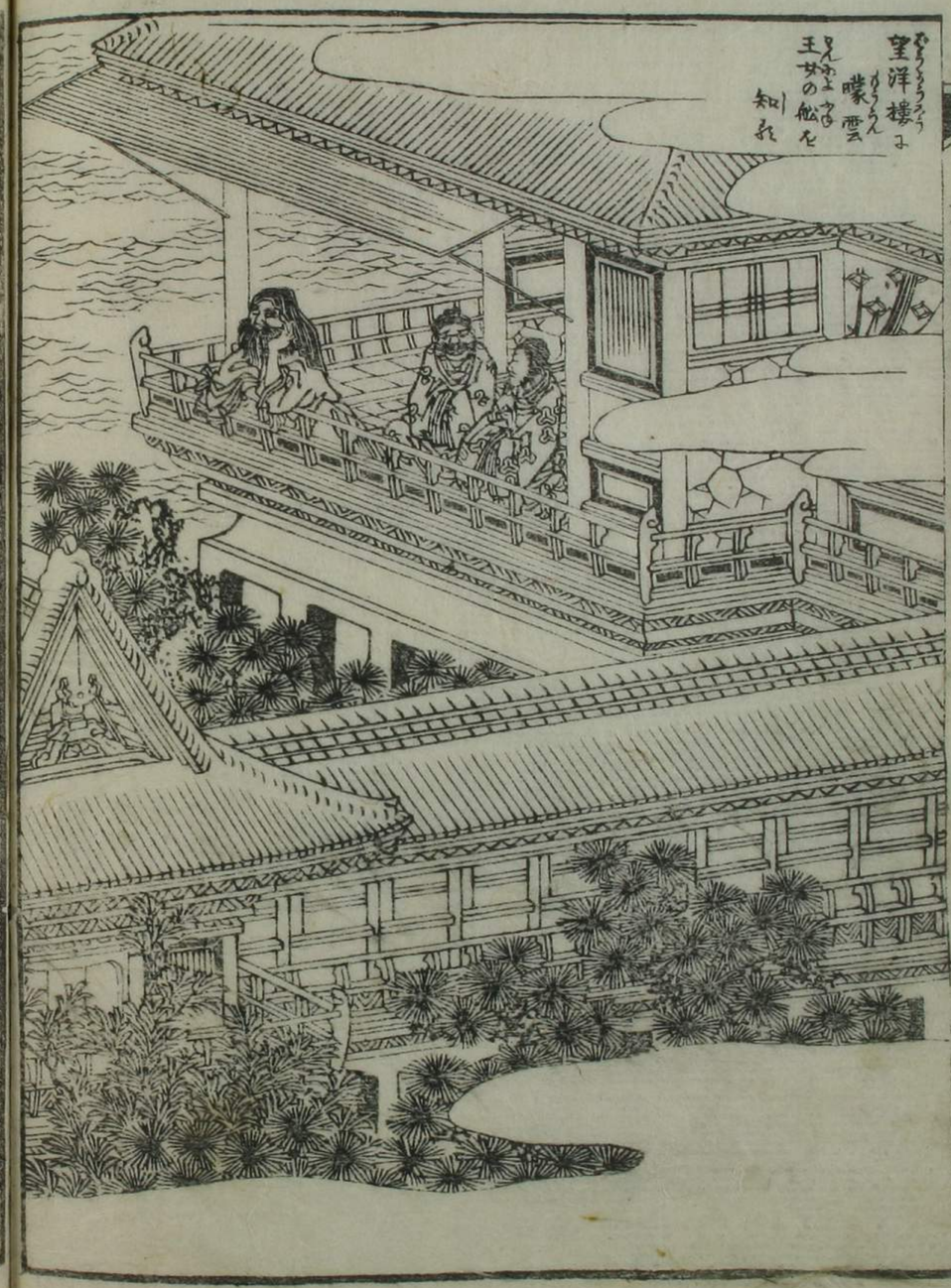
羽毛國冊査國吉ホ゛忠死のるゆなどと同す。説も志らしとまゐ
とて。面新こそ憔悴多。昔ホ寡かのりまるど。亦為朝の按司にあり
まふと歎び。羽衆天九ゞるゆゑ巳とて。うち歎てまふとて。越のいひ
ざゐゐども。日本人めて。更ホ王女ま似まるど。松妻ハこの形勢ゆえく。
為朝の必此ゆゑりし。偽なくざりけゑと嗟嘆して。信ゆふいひ
慰めすねふとて行ふ。長い浦の老弱と共もに。鮮魚海藻ゆえく。
松妻ホと歎稽し。みる歎びを述て。勇ゆ寄ゐるゆのゑ。当下
王女ハ松妻ホ對して。これ為朝の故妻にしく。昔の王女ま為るど。
こゝとりて浦人ホ。白縫王女と称し。或ハ白縫姫と嘆ぐり。抑こゞ為。
迹をこの浦ホ癒しこゝろよ。冊きはゐる少女二人あり。一人ゞ名ハ
あゐいゐぶと嘆れ。又一人ハみゑまといふ。彼ホ父もゐ。母もなし。

いと惜きものゞもなれバ。南風ゆ人羽てゆゑんとおすゐ。このゆいゐ
めゐべきと同ゐ人。松妻且く尋思ゆゑれふ。あゐいゐぶゆを丹頂ゆて。これ
為なり。みゑまい三曲ホして亀なり。さて浦亀只牙もゆの生ゐ
ありけて。と猜して莞爾とうち笑こゆ。浦の少女松南風ゆ人羽てゆきゐ
ゐゐゆ。中かれべしとハ思ひいゐ祈ど。大臣利勇ハ狐疑多し。いまゞ
その中を告ゞて俱しまゞ。彼りのゐ為ホ殃の端となるべし。某浦長
ホこゐろ紹さし。別ホ心祝をとりて大里の城へ送り遣そゞ。と回答ゐ。
王女も又松妻ゞ胸中を猜して。ゆゐゐびこれをいひ出まゐど。ゐりゐ浦
亀と浦長ゞ家ふありとい人ども。松妻ホ對面せゞりゐれ。さて次の日
退風ゐ乙て松妻ハ王女と船ホ扶乗し。月ゆゞ。その海の軍紅芋ゆ
ゐ濩して。砲を遥ホ漕出せバ。浦人ホ名残を惜ミ。慕ひなるゆ為朝

と別れしとなれば異なるべし。王女世の中ひろくなりまへば。浦曹司と共に。
曚雲を討滅し。白日青天をみるせまくなしと嘆ぶこゑを浦風さへ吹
おくりて。いとゞ哀れいやましたり。この時曚雲は。望洋樓ふ登りて。
遥ふ海上をうちながめ驚れつゝ。左右式部かくりてらくるに利勇
たゝふぶも。漂客の壮士を招て。それゞゝ名ふ随ひ。王女と佳奇呂麻
うり呼びのぶして。件の猛ふ妻せんとを。王女の私ハ。今夜小禄の
港ふ出べしといふ。折ふ一その席ふ侍りしう。三司官棟遜耳
目官全廣縁由を伝てうち驚れ。志ふぶ吾們軍兵を引く彼処ふ
赴て王女を奪ひとるべしといふ。曚雲既をうち掉つゝ。亦且く打
眺て。呵ゝと冷笑ひ。彼壮士ハ智謀あり。王女をも護さるりの松事
なれべ。志るとれハ。私ふハ不虞の備あり。陸ふハ数百の伏兵あり。

よゝや王女を奪ひとるとも。つゞ士卒を損ずべし。且王女ハ舊の王女ふ
志て。舊の王女ふ有ふぶ。これを奪ひとるをいふとも。その益なしと仰さり。
さるふよりて。これ王女が佳奇呂麻ふ有ふを猜ゝれと。討ずの決
よりよりぞ。かゝるべきの式後ゝ志れば別ふ奇計を設ゝるまふ利勇
に自滅さして。後ふ件の壮士と結まるべし。志ふハ有れと。利勇ふ命数
いまゞ盡ぞ。今より六七年の月日とおくゝふば。つゞ謀成就せん。騒くべ
かゝふぞ。騒くべゝふぶとて汗さまハ棟遜全廣感服して。法王の神技妙
算。今ふしぬめぞと稱賛ぞ。さる行ゝ王女ハ志ふく。小禄の港ふ着船
ずて南風原の城ふ入りの人ハ。為朝も又兵を纏めて大里へ帰りの人
ふけりぞれハ利勇を恭しく。王女を城中へ迎入るゝに。王女を利勇を
入て遠しく答れ。つゝつゝ為朝が妻ふ。白縫と名るりのふ付り。




望洋樓より
曙雲
王女の船を
知る

大呂の爲信礼まるてくりと回答ふ。ねのいひざる。琉球言語ふあらざんば。利勇い呆れて。まんが赤蕉舎ふ誘ひし。女房五七人ゑ冊して。竊ふその為体を窺ふ。ようり伝くあらぶ。げふ王女ハ曩ふ松壽に惹れうるを。ふこれい王女の亡魂が。他婦ふ憑ふるなるん。されば面紙こそ王女ふ似られ。その人ゆあらざりけり。志ろとも。これ今この女を王女ふて。為朝ふ妻せるバ。世の人これを義士と稱ん。ちるるりく。と意の中ふ計校て。遂ふ松壽と疑ど。猶て黄道吉日と卜食して松壽ゑ。王女を大里の城へ送りし。婚姻のるを。とり行ひるに。為朝ハ。再三再四推辭まくども。その脱ぐ。されば已こと。ゑ。赤繩の繫れ。ふ任しまふ行ふ。夫婦の契浅ふ。分てる境を令てるぬ。ゆくて。有一日。佳奇呂麻の嶋長が。持魚と小松ふ乗して。潛ふ大里へ送りし。

うが。為朝これを呑び入れて。兄と弟が忠孝を賞嘆し。浦長ふ。敎。駄ふ。て。佳奇呂麻へ。松壽が志の。これふ等を曉り。婦魚をふく。潛して城外へ出しまうる。

第五十三回

人を的ふして利勇強弓ふ誇れ
馬ゑ乘して松壽危窮を告ぐ

今茲も既ふ暮て。ゆふ玉のとし立かくり。世ハ安らやくに暖ふれども。人のこころハ長閑ならぬ。為朝ハ。曙雲ゑ討滅さん乃ふ。りりちる人馬を調煉し。民ふ教るふ仁義を以し。賞罰法令に。當ふざれとるりしぶ。士卒おのくその職をちり。軍民おのくその業ゑ。ふのみ。德ふ化せどといふ。白縫王女。亦頗婦德あり。自ら蚕養して。機織を勸めるひしかば。大里十八処の屬村。とぐく治りぬ。

これあり。こゝに南風原の城あり。大臣利勇驕ほしゐまゝなる紅粉美女海棠と称する。これを鍾愛し酒宴を専らにし長夜日もすがら飽ざとて。これを続ぐに燭をもてし。絃歌の声絶る隙なれど松壽は傍痛くおぼえて。ちゞくこれを諫れども。雲ざうも用ひず。曚雲久しく境を犯さゞれば。つゞ武威を怕るゝのみ。萬世の功名も生前一杯の酒あれば。ちうこの時を楽ぶべし。老て命終るの日悔もいとゞ及ぶべき。これ幼主を補佐して政を私なく。民の為に疲労しうかゞうの保養をこゝろゆるぶべし。と回答して諍ひ諫るもあれど。非法のこゝろゝしかど。軍民怨恨を含んで密に大里へ志ばせんとするもあれど。流石に利勇が威勢に憚りて。氣をあらせざるに。利勇は民の歎訴を

かゝりこゝろゝして。これを治めを賞し。諫めを罰し。只恣寵呂禄が徒同氣相求る佞人ばかりを重く用ひて。歌楽を共にし。その傲慢季氏が八佾あもるとて。さるゝ國王の招びに異ならず。こゝろゝして丙子の春秋は過ぎるとそ。為朝頻に上啓して。人馬肥兵糧饒あり。郎刀を賜りて。曚雲を討べしと請ふ。人々これを可とせず。夫兵は凶器なり。民の希ふ所にあらず。勢ひ首里と攻て。その軍利あらざれば毛を吹疵を求るなり。只固く守りて兵を強くし居るべし。武威は張れば志ばとして聴さ給ふ。為朝は只歯を切り徒に月日を送るのみ。松壽は是彼の形勢を見て。禍ひ及んでもいとゞ南風平に成て松壽は是彼の形勢を見て。禍ひ及んでもいとゞ南風平に成らんとのこゝろゝしうして。竊に腹心の郎黨に謀を授城中に流言せ。かゝて誰いふもなく。東風平の軍民に按司の久しく南風原に

あるを見て野心を起し。城を焼て。朦雲に陣にせんとてうろよし囂く
として風声きこえしかバ。利勇ハこれを傳へきゝて大きに驚き聴て。松壽
を呼てしかじか。辺邊久しくこの処にありて。東風平の軍民に。敵
に内應せしものありと聞ゆ。ともく彼地に立かへりて。謀反の徒を擒捕り固く城
をまもりて。かろ〳〵しく出仕をなすべからず。と命ぜられ。松壽ハさかりしるあれ
ど。欽然として領掌し。即當を以て即日東風平の城へ立かへり。その
後ハ絶て南風原へ出仕せず。利勇ハ松壽が傍になけれバ。ゆるく後
患なき心持して。只彼海棠と翠帳の下に枕び戯れ。酒に暮らし旦
にあかして月日の代謝をおぼえず。とかくに五六年をすごしにけれど。
為朝頻に焦燥て。亦大里より上路して首里を攻んとて既に詰の人ぞ。
利勇ハその来啓を見て冷笑ひきかバ。まんず。それみづからに人馬を調煉

さく弓勢のほどを志らせんとて貢米未進の農民等を搦捕しかく
弓場殿に縛てこれを的とし。矢庭に射殺して楽ことぞその暴悪桀紂
に異ならず。然れバ心あるも心なきも。みな爪弾して。大臣ハ禍獣よりもおそれ
と呟くを海棠ハきゝてその讒るものを生けるによりて。利勇ハ亦
讒るものを擒捕らし。新刀を試すと称して手ほからこれを斬されバ
罪なくて命を隕ものおほかりかく。利勇ハ有一日海棠とともに城の
樓に登りて遥に人の往来をみるに。海棠ハおもひさまさまにて
潜然と泣ければ。利勇驚きてその故を問に海棠ハいよ〳〵泣さく
大臣妾が思ひを志らんとならバまづ左右の人を遠ざけ給へかしと
いふに點頭て女房里之子等を退かしめつゝひとりのみ。これを問バ海棠
なほやゝしばらく涙をおさへ大臣ハよろづに賢くおはせども眉に火の急

人を的中て、利勇箭を飛す。

患あるを恐りまうさで。為朝久しく。大里の城をもりて。民のこゝろ弱く絶
まうされば。曚雲を討と稱して。時々人馬を調煉し。東風平なる松寿と
計を牒あはして。大ほとうしまひまゐらせんとて。あれ廣せこの城下に
往来するものも。大里のうさへゆくゝ。こゝろさへまるハ稀なり。加之
王女の為紀ゆ適りまひてより。人こゝろこれを駙馬と稱ぞ。その威權
をさく大ほに茅らねを。皆閑ふこゝろハいうゆぞやかゝてハ終ゆ彼
ホが為ふ醯よせふれまうふべしとゝくハ悲しく朽をしく禁めらる袖
の雨。をれぬゝひを。もりまくと言まふ巧ふ喞ゆぞ。利勇ハ。ちくぐとゝ
果て。大息つゝ寔ふゝひあるれことあり。只速ふ應崔呂緑を大切と
もて。數の軍兵を指向大里東風ホの両城を攻落して為朝松寿が
首級をうんさんとて。ゆゞてまんとすると。海棠ハその袂に引とゞ

為朝が勇。松寿が智ハをる是人のもゝる所應崔呂緑ハその歎ふふ
あゝぶ。ゆ大里を攻るとゝハ。東風平より救ひ。東風平弱くハ。
大里より援ん。内乱既ふ起りて。曚雲その虚ふ乘ゝぶ。遂ふ両
ゝぶ防ぐふ術なるべし。只詭て為朝松寿を呼びよ。力士ふ仰て
摘捕らしまゝ。刃に衅ぞして。両虎を獲まゝべし。さハ仕ゝぶゝやと
密語ば。利勇ハ喜ぶと拍く。大ひふ歎び。宅ふもん分を丈を両主の
少女まりこの計畧究てはし。王子ハ今茲六才ふなりまくハ音縊ある
ぶしと。今きゝさんこの拜賀ハ洩ることなく。為朝松寿もつゞ弥
ふハるべし。きゝまりくとせうやくふ公もちかて。やゞて應崔呂緑ホ
を呼集合。件の密討を說きゝて。今月某の日。王子著縊の拜賀
にて。緒按司系内ハるべしぞ。今ゝりけれ。さる終ふ為紀ハこの年

身をとゝもなく。月日をおくりあふうふ。終に功名の立がゝりを憤り
ゐふふ。白縫王女は。舜天丸の。往方いかゝと思ひ。世ふあぶはこの
春は。年を十二ふゐ。ゆゑ。世あの世とゝくことなれ。つゞ第二の鬼
神。其あるものは。重山の。震の外もゐるとゝ人どゝ。ゐほ知りがゝれつゞ子
の存亡。子故の闇の闇。ゐは迷ひの雲の霧ぬ。とかれに説ゐふ祈
うふ。忽地南風ゐうりのゐん使と稱して。國書院の官人。拜賀のゐゆを
告ゐれば。爲朝を衣冠を整出迎てこれをうけゐふれふ件の官人
を。從者をいとがゝ。亦東風平へとて走去ぬ。かゝてその夜更蘭
て。頻ふ大里の城門を敲くものあり。門をゐる兵ホがゐゝしくこれを
入れば。まゝ按司ふゐうしてゐそゝて。ゐ一かゝ。爲經はゐゆの趨ゐきゝく。
ゐゝゐゝ物見の窓ゐりえゐふ。陶松壽ゝ只一騎。潛びて東風平

より來れるなり。怪とゐゝゐ城中へ迎入れ。まゝゝ燭を秉く。閑室
に誘引。その故を問ゐ。松壽は。ほとり近く。膝をゝゝ某小夜
深てまゐるゐ。火急の一大事を告ゐうきん爲ゐり。といひも果ぬ。
ゐは声高し。と爲朝は扇を揚て推禁ゐ後方を佶とえかゝりゐ。
一室隔て偏剌の刃を告れ。音をゐり。畢竟松壽ゝゝに來ゐ。
いゐゐれ故ゝ。次の巻ゐ続ゐてゐん。

日蓮聖人目
花山堂
京 滿
屋
町

椿說弓張月拾遺 巻之三 畢

嘉山堂